

保育科短大卒業生の動態について

宝仙学園短期大学 岡 田 正 章

一 保育科短大卒業生全員に、卒業後の実態調査書を郵送によって配布回収、回収率三五%、一二七名分を得た。これによって、保育科を専攻したものが、保育界にどのような連がりをもっているかを明らかにし、保育者の定着性とその専門性との関連を考察する一資とする。調査は昭和三五年一二月末から翌三六年一月二〇日の間に行ない、また同時期に、文科一五四名、家政科八〇九名、英文科四六五名、栄養科二〇九名、音楽科一七〇名をもつ四女子短大卒業生全員に同様の調査を行ない平均回収率三二%のものと比較することを図った。その結果と問題点を二、三指摘すれば、まず第一に、卒業生のうち就職していないものもしくはしたことの無いものは僅か二名で、他学科卒業生で、稽古事修業中のみのものが約二〇%近く、家事見習者が約一〇%いるのと極めて対称的である。その上、九六%までが幼稚園教員に就職しており、したがって自己の専攻学科に一致した職種にいる。これまた、他学科専攻者が専攻学科に一致した職種につけていないことと比較して、好条件にあるといえる。

このことと関連あつてか、第二に卒業生の六〇%は自己の保育科専攻をかえりみて満足している。家政・栄養・文科の順に低くなり、音楽科が最も高い。スペシャリストとしてのコース、そしてそれを受入れる社会条件の存在は、専攻学科に対する自負を一層強めているようにみえる。

しかし、第三に、卒業生中四〇%が専攻学科に対する自負をもちえておらず、その原因中最大のものが、卒業後実社会に従事して感じたものとなっている。このことの究明こそ重要と思われる。果して、保育者の仕事の内容に対する適性のない発見という、内面的ないし本質的なことがらなのか、もしくは外的な条件から受けた影響からきたものなのか。前者は、ほとんど大学在学中に発明され処置されているようである（この点は更に養成課程において慎重な配慮が必要であろうが）。むしろ問題は後者にあるようにみえる。なかでも園内の人間関係と保育者の社会的地位に関するものが大きい。

必ずしも多い事例とはいえないが、幼稚園を転出するときの理由のなかで、勤務先との意見相違また仕事に対する不満が比較的多くあげられていることが等閑視できない。このためには、園長を中心とする職場での人間関係を真に働きやすいものにする工夫が必要である。因みに、園長は卒業生を四年制大学卒業生と比較するとき、職業に対する態度、明朗さ、誠実、協調性において劣っていると、語学力、批判力、常識、専門的知識において劣っているとみている。前者がすばらしい幼児教育者の核的な側面であることには全く同感であるが、後者について、果して園長はどれだけ、保育者自身の向上に心を注いでいるのだろうか。劣っている点として一応事実を認めるとしても、その側面の前進、そしてそのための保育者自身の自主・自由の保障こそ、これら卒業生をして更に一層専攻学科に対する自負を深めさせるものと知らねばならない。

第四に、保育者の社会的地位に関して、卒業生の収入問題も無視できない。もちろん、保育者の道に進もうとする人々が、物質的処遇のみを処遇と考えていないことを云々する要はここにはない。ただ専攻学科別の月収を比較すると、他学科専攻にあつては、一万円

以上一萬五千元以下のものが過半数をしめ、八千円以下のものが比較的少ないのに対して、保育科専攻の場合は、一万円以上のものが僅か一〇％で、八千円以下のものが約三分の一近くいることになっている。すでに、各方面でいろいろな対策が考えられているが、今日の各種産業の好況下で、今後一層の改善が望まれる。

最後に、卒業生の結婚状況であるが、回答者中約三〇％が既婚で卒業後何年目に結婚したかと問えば、三年目中最も高く、五年目、四年目がこれについている。この傾向は、他学科専攻者と格別の相違を認めない。むしろ、既婚者中約半数が夫に教員をえらび、また、結婚後も保育者の仕事をつづけているものも約半数いることなどは、他学科にはみられない特色といえる。幼児教育における職員構成から考えても、既婚者中なお職場において専門性を高度にするこの可能性を幾分か推測できるが、関係者の理解が一層望まれよう。

以上のことから、保育科短大卒業生は他学科卒業生と比較して、主体的には自己の専攻学科に一種の自負をもち、結婚後もなお専攻学科の生きる保育者の道を歩もうとする気魄をもっているといつてよい。しかし、客観的には、給与体系の問題性、勤務施設での意見阻礙の処理方法などが原因となつて、その継続勤務を阻んでいる点を認めねばならない。今後、こうした領域の困難点を一層明らかにし、保育者の定着性と専門職化に一層寄与したい。(大会抄録157—159頁)

保育者のモラール調査 (その一)

大阪樟蔭女子大学 西本 脩

問題 幼稚園や保育所で働いている保育者が、毎日愉快にその職務を果たして、幼児の幸福をもたらすためには、単に物的環境条件や労働条件を改善するばかりでなく、保育者のモラールを高める方策を検討する必要がある。

そのためには、まず、保育者のモラールの現状を科学的につかまなければならぬが、その一助として一調査を試みた。

調査の方法 保育者のモラールを測定し、評価する方法には、いろいろ考えられるが、今回は、つぎのような五項目の質問からなる質問紙法によつた。これらの質問は、いずれも保育者の職務との一体感を異なつた角度から尋ねているものである。

調査に協力し、回答を寄せられた方は、市および市の公私立保育所保育、計一九九名であり、調査の時期は、本年一月—四月である。

〈保育者意見調査〉

つぎの質問のそれぞれについてその次に書いてあるいくつかの答の中から、あなたの気持ちに一番あてはまるものをつえらんで、()の中に○をつけて下さい。もし完全にあつてもよいが、一番あなたの気持ちに近いものに○をつけて下さい。

一、あなたは、現在の仕事を選んだことに対してどう思っていますか。

イ () 非常に満足している () 先見の明があつた

ロ () 思ったよりよかつた () これからよくなるだろう

ハ () 考えたことがない () どちらともいえない

ニ () 欲をいえばきりがない () 思ったよりよくなかつた

ホ () 今さらしかたがない

ヘ () 非常に後悔している

二、あなたは、お子さんのうちの誰かに今のあなたの仕事をやらせたいと思いますか。(現在子どものいない人は生れたとして)

イ () せひともあとをつがせたいと思ふ

ロ () やらせてもよいような気がする

ハ () 子どもの自由だ () () どちらでもよい () (今はわからない)

ニ () 気がすまない () () なるべくやらせたくない

ホ () () 絶対によらせない